

文化遺産調査特別展「美と知性の宝庫 足立」1P
 もくじ 千住警衛と天狗等の乱③ 2P おでかけ下さい 地元の古代⑥ 4P



谷文晁書「雅号状 文測」
 船津文測筆「四季草花図小襖」(秋から冬へ)



足立史談

第576号

2016年2月15日

足立区教育委員会
 足立史談編集局
 足立区立郷土博物館内
 〒120-0001
 東京都足立区大谷田5-20-1
 TEL 03-3620-9393
 FAX 03-5697-6562
 (27-308)

文化遺産調査
 特別展
 「美と知性の宝庫 足立」
 —酒井抱一・谷文晁とその弟子たち—

会期：3月13日(日) ～ 5月22日(日)

文人たちの豊かな交流の地

まもなく開催の特別展は、郷土博物館の文化遺産調査によって明らかになった調査成果によるものです。

初めて公開される資料はもとより、これまで、知られていた美術資料についても、新しい事実がわかってきました。今回の展示では、これまで紹介した美術資料も再編し、豊かな教養に満ち溢れた足立区の人々の文芸活動を紹介します。

■船津文測とその日記

今回の展示のキーマンの一人に船津文測がいます。船津文測とは、現在の足立区江北にあたる上沼田村の豪農船津徳右衛門重許です。重許は、周辺七か村をまとめる村役人であるとともに、当時、絵師・文人として第一人者である谷文晁に弟子入りして、若くして画を学び、二十歳で「文測」という雅号を許されました。谷文晁から文政九(一八二六)年に授与された雅号状が残っています。「文測」の「測」は、測江領というこの地域の名前から由来するものと思われ、足立出身者にふさわしい雅号といえます。文測は、文化三(一八〇六)年に生まれ、安政三(一八五六)年、五一歳で亡くなります。嘉永二

(一八四九)年から、安政三年九月に亡くなる直前まで「葉庵雜記」と名付けた日記を残しています。

こうした記録には、谷文一ら同門の人々との画本の貸し借りや訪問、小旅行など、絵師としての付き合いが記されています。また、近隣の有力農家から扇子や襖、掛け軸などの絵の制作依頼が次々と来ていることが記録されています。なかには、「総持寺」という文字も見え、西新井大師からも扇子の注文があったことがうかがえます。

■谷文晁の遺産

文測は、文晁の弟子として、台東区台東にあった文晁の画塾「写山楼」にも出入りし、谷文晁の孫・文逸(二世文一)と親しく付き合っていたためか、文晁・写山楼の所蔵であったと思われる多くの資料を譲り受けていました。その代表が、粉本や下絵です。粉本とは本画を写しとったもので、絵師の行動や、思考をうかがうことができます。多くの粉本や下絵は、絵師そのものを知る資料として多くを語っています。

また、文晁が収集した貴重書も伝えられてきました。「三十六歌仙」は嵯峨本とよばれる木版の豪華本で、本阿弥光悦、俵屋宗達といった人々が関わって作った趣味を凝らした和本です。「光琳百図」は、抱一が光琳の画をまとめた作品集で後年

何回も刷り増しされました。船津文
測家のものは、その状態の良さから
文晁が抱一から直接受け取ったので
は？ と推測されるものです。

■背景を語る資料 多くの美術品が、
長い年月のなかで、最初の持ち主の
手を離れ、転々としながら伝来して
いるなかで、船津文測家の美術資料
のように、まとまってその家に伝わ
るといのは珍しいことです。さら
に、その美術品が制作された経緯も
わかることは大変貴重な事例です。

足立区内の美術品は、それを伝来
する家と作者、さらに地域といった
つながりがうかがえ、豊かな歴史と
文化を語る資料となっているので
す。

今回、船津文測家の資料を通し、
足立の人々と江戸の文人たちのネッ
トワークが分析されました。足立の
人々は深い教養と美術を愉しむ心を
持ち、この地が最先端の文化の発信



船津文測 「猛虎図」

地となっていたことがわかりまし
た。そうした文化の流れのなかに、
区内の家々に伝来する資料がありま
す。足立が美と知性の宝庫であるこ
とが明らかになったのです。

《展示構成》

一階ホール・企画展示室

第一章 江戸と足立の文人

建部巢兆、江戸と千住の
琳派、谷文晁一門と船津
文測、写山楼の古画学習

二階ギャラリー・第二展示室

第二章 受容する江戸近郊

文人久五郎・絵師文測
名士のライブラリー、千
住足立に集まる

後期（四月一九日から）一部資料の
入れ替えを行います。豊富な資料を、
全館特別展仕様でご覧に入れます。

資料紹介

千住警衛と天狗等の乱 ③

多田文夫

酒井忠篤の警戒

■幕府への急報 元治元（一八六四）

年六月末に発生した水戸藩士・天狗
党の千住参集事件の緊張は江戸府内
にも及んでいた。千住警衛をつとめ
る出羽松山藩の本藩、出羽庄内藩（鶴
岡）の酒井藩邸では、水戸藩士が問
道から江戸に入るのではないかと警
戒し、幕府に報告と伺を上げている。
再び「操兵練志録」（庄内藩士秋保
政右衛門著）記載資料から引用しよ
う。文中の「酒井左衛門尉」とは、
のちに奥羽越列藩同盟の一員として
新政府と戦った酒井忠篤（さかいだ
だずみ）である。

警衛申上候様仕度奉存候、依之此
段奉伺候、
六月廿七日 酒井左衛門尉

この資料を見ると、千住警衛の警
戒網をかくぐり水戸藩士が江戸府
内に入り込んだら、①鑑札も持って
いること、②乱暴者でもないので取
り締まれないこと主張し、それなら
江戸城御殿に兵士を配置したいと幕
府にたずねている。この報告の結果
は七月四日になって幕府から江戸市
中の警備もあるから、準備だけして
おくよう指示が来ている。

ところで当時、江戸城の御殿は本
丸も二の丸も前年（文久三・一八六三
年）に焼失し田安德川家屋敷を利
用していた（いまの北の丸公園あた
り）。文中の「田安仮御殿」とは当
時の江戸城御殿のことである。

水戸表より追々多人数罷登、間道よ
り御府内に入込、町宿等致し候者も
多分有之様相聞候得共、何分水戸の
鑑札所持致し居、市中乱妨は勿論、
差当り格別の所業も無之上は、可捕
押様無御座、尤是迄暴行の浮浪輩共
違、私方にて御取締可相立様無御座、
去迎多人数間道も罷登種々風聞之次
第も御座候上は、如何様の企及も難
計存候間、処詮此上は田安仮御殿え
相詰、御

六月二十七日の緊張の後も、「水
戸藩士の千住に集るもの数を知ら
ず」（前回掲出、阿部正巳『川俣茂
七郎』大正十四・一九二五年）と、
さらに情勢は不穏な様相を示してい
た。しかし天狗党の水戸藩士たちは
千住の関所（番所）に来て「入府
を迫るのみにして、毫も抵抗するこ

となく」経過したと記されている。

■**出羽の酒井家** 入府の許可を待つ水戸藩士の姿勢と、千住警衛をつとめていた出羽松山藩と本藩(庄内藩)が極度に警戒する様子が対照的な一幕である。出羽の酒井家は武断の藩だったことで知られた。のちに薩摩藩邸焼討ち事件を起こし、奥羽戦争では官軍相手に連戦連勝しほぼ無敗という戦績を遺した。実に警衛役に相応しい家中であった。

酒井忠篤は、戊辰戦争での降伏に際し、寛大に措置した官軍の西郷隆盛に共鳴し、明治三(一八七〇)年に、元藩士たちと薩摩へ移住し西郷に学んだ。西郷隆盛の遺訓として知られる「南洲翁遺訓」が元庄内藩士らがまとめたのはこうした酒井家の歩んだ道がきっかけだった。

■**想定された戦闘** さて千住警衛が布陣する千住の関門(番所)は出羽松山藩兵と近江宮川藩兵が守りを固めていた。

両藩は千住の関門と天狗党が多数宿泊している新宿(葛飾区)で戦闘が起ると想定して、次の報告を幕府に出している。

此節水戸殿御家来多人数新宿並同処川手前迄罷越、不容易風聞も有之、何時如何様之異変出来仕候義難計御座候処、当御番所持場之儀は、一体御取締も不宣、万一非常之義御座候

節は、防戦手配も行届兼候間、万一之義御座候様様之節は、大橋際え引上、防戦候場合も可有御座候に付、此段兼て申上置候、

七月朔日 酒井大学頭

堀田豊前守

文中の「当御番所」とは千住五丁目の安養院を本陣とする千住勤番の関門(関所)をさしている。この報告者は千住勤番の出羽松山藩主・酒井忠良(さかいただよし。大学頭)と近江宮川藩主・堀田正養(ほったまさやす。豊前守)で内容は次の三点だった。

・天狗党の一派は情勢不穩
・五丁目の番所の立地は防戦に不利
・千住大橋まで退いて防戦したい
忠良と正養は、「防戦」という表現を用いて幕府に報告しており、兵力では少数だった千住勤番の緊張が伝わってくる。もし忠良たちが想定したように実際に戦闘となったら千住宿は戦場となっていただろう。

しかし、臨戦態勢の千住警衛に比べて天狗党は千住の関門の外で、入府の許可をひたすら待ち続けた。彼らは「人家に止宿する能はずして、原野に起臥し、食尽きて餓ゆるものあり。」(阿部前掲書)という状態で、とても戦闘どころではなかったようだ。

騒動の収束とその後

■**終息―入府許可―** 酒井忠良は、桐生に出張していた藩士を千住に呼ぶなどして兵力をかき集めた。しかし七月二日になって幕府は天狗党員のうち執政の榊原新左衛門ら五〇〇名の入府を許可し、榊原は小石川の水戸藩邸に入った。

こうした一連の措置で千住の関所外、新宿方面に群集していた天狗党の水戸藩士たちは国許へ帰還した。そして出羽松山藩酒井家は、七月十三日に千住警衛役から江戸府内の昼夜巡回警備役となった。

■**千住と天狗党のその後** 千住警衛は戊辰戦争まで継続し、東山道総督や北陸道総督等の官軍が千住に宿陣しても活動していた。さきに酒井忠良たちが想定していた戦闘は、実際に慶応四(一八六八)年四月十九日―二四日に発生した官軍(東海道総督指揮下の佐土原藩兵)と幕府脱走軍誠忠隊の間で発生した。

この時の戦闘は、松戸方面から水戸道を上り江戸川を渡河しようとした誠忠隊に対し、千住宿に駐屯していた佐土原藩兵が金町側の江戸川河畔に陣をかまえ砲撃を加えた。そうした中、誠忠隊は別働隊を組織し佐土原藩兵の背後をまわり千住に移動した。地の利を得るため佐土原藩兵は急いで大橋の南側に渡り、千住大橋をはさみ対峙した。のちに誠忠隊は降伏したが千住が江戸の関門だっ

たことを物語る戊辰の戦いである。この千住に集まった天狗党の一派は分裂し、先に水戸藩邸に入っていた執政の榊原たちも分合を繰り返して一〇月に幕府に降伏した。ほかの党員と首領の武田耕雲斎らは、十一月に京都を目指し、常陸の太子を出発した。遠く下野―上野―信濃―美濃―越前に至り現福井県敦賀市で加賀藩に降伏し彼らは死罪となった。

* * *

ここまで紹介した天狗党と幕府千住警衛の対峙した事件は、足立周辺で幕末動乱の幕開けを意味する象徴的な事件であった。

千住警衛の関門(関所)は鑑札が無ければ通行できず千住以北の村々は日常的な野菜の出荷に影響が出ていた。千住での幕兵の駐屯は日常化し戊辰戦争期には官軍が宿陣、東北方面への出撃拠点になった(『幕末が生んだ遺産』足立区立郷土博物館)。

そして天狗党を生んだ水戸藩領では内部抗争が激しくなり暗殺や襲撃が相次ぎ多くの死者を出した。

いま党を率いた耕雲斎の姿は水戸ではなく死罪となった敦賀市で見ることが出来る。収監された土蔵がある同市松原神社で祭神となり像が建つ。遠く北陸にある最期の地はいま国の史跡となっている。(終)

おでかけ下さい 地元の古代 ⑥ 伊興遺跡公園展示館

水辺の記憶—古代舟地下から現る—

足立区地域文化課文化財係

伊興遺跡公園展示館と遺跡からうかがう地元の古代の様子を紹介するシリーズの最後にあたり、古代伊興遺跡がどのような場所であったのかを雄弁に語ってくれる出土資料をご紹介します。

約一七〇〇年前の古墳時代のはじめ頃、毛長川は今と異なり川幅も広く、現在では毛長川から一五〇mほど離れた距離に伊興遺跡公園は立地しています。が、当時、この毛長川の岸に沿いに人々が集住したムラが形づくられました。伊興遺跡公園は、ムラの人々が使用していた生活用具などが大量に出土した地

点の跡地に造営されています。

伊興遺跡公園の北側にある氷川神社にも、古代伊興と水辺に関する記憶が伝承されています。「明治五年

神社取調書書上帳 その二 社事掛」に収録された地元の聞き書きによれば、大昔、この一帯は広い入江で、この神社はもと「淵之宮」と呼ばれ、淵江郷（ほぼ現在の足立区）

一帯の総鎮守であったと記されています。また、「明治十八年中内務省地理局へ取調書写」は、淵江郷はこの社から発祥したと述べています。「淵之宮」という社名は毛長川の岸

辺の社であったことを示しており、また、固有の神格を太古より祀っていた人々の定住があったことを意味しています。このことから、伊興地域が足立区における人々の定住の始まりの地の一つであると言えるのです。

当時、伊興は東京湾が深く東京東部の低地に入り込み、そこに流れ込

む大河の河口のほど近くに立地していました。これまでの発掘調査では、古墳時代の遺物が大量に発見されました。特に舟は大きな発見の一つで、一九九二～一九九四年にかけて行われた調査で船先（へさき）部分が数点出土しました。舟材は、その形状から、一本の材木をくりぬいた丸木船ではなく、木材を各パーツ

で継ぎはいた準構造船と呼ばれる舟であると推定されます。準構造船は、古墳時代から造られはじめた舟です。数点見つかったうちの一点が伊興跡公園展示館の正面入り口左手

のケースに展示されています。また、舟材に先立ち、一九九二年の調査で、準構造船を模した全長三〇cmほどの舟形も発見されています。出土した舟形は、古墳時代のはじめ頃のものに見られ、舟の航行の

安全を神に祈るため、儀式中に巫女が用いていたものではないかと推定されています。舟形は、レプリカが

舟材と同じケース内に展示されています。舟材のものと舟も、レプリカと同様の形状をしていたと推測されます。

古代の毛長川をこのような舟が航行しました。伊興は外洋と関東の内陸である埼玉県埼玉（さきたま）古墳群に付随する有力な地域と畿内の大和政権との交流を媒介した舟運の重要な中継地点であったことが、子持勾玉などの特徴的な遺物の出土から分っています。また、朝鮮半島産の土器（韓式土器）も伊興遺跡からは出土しており、長い航路を経て、

毛長川をさかのぼって運搬されてきたものの一つと推定されています。古来、毛長川の周辺はたびたび川の氾濫がおこり、被害も甚大であったことが想像されます。しかし、その川を行き来した舟は、当時の伊興の人々にとっては見果てぬ地から未知の人と物をもたらす大切な交通手段であったのです。

古代伊興は南関東の一角にあって、海洋と河川を結ぶ水の動脈に寄り添うムラでした。

（遺跡発掘調査員 増田静香）



【上】出土した舟形のレプリカ
【下】準構造船の舟材



伊興氷川神社（東伊興 2-12-4）



古代の東京湾周辺と伊興遺跡